



ファイターズのOB紹介

社会で輝く青き星

8

「生涯ファイターズ」 木本 公敏

【吉本興業株式会社】

木本公敏(きもと・きみとし)／吉本興業株式会社経営戦略本部 本部長。関学中学部入学と同時にフットボールを始める。大学では高等部のコーチを務めた。主にディフェンスを担当し、大学2年生時に日本一に。コーディネーターを務めた大学4年生時には、後にファイターズで活躍する有馬隼人擁する箕面高校を破って関西制覇。決勝のクリスマスボウルでは関東代表の法政二高を破り全国制覇を達成。卒業後、吉本興業株式会社に入社。多くの芸人のマネージャーを経験。その後、企業営業やプロモーションを担当し、現在に至る。1996年3月、商学部卒業。



印象に残るエピソード

中学から大学まで、10年間をファイターズで過ごした木本さん。関学フットボールのイメージがあったから、入部のきっかけは実は「なんとなく」だった。

中学部ではD B一筋。高等部ではQ Bのポジションを与えられたが2年生の時に椎間板ヘルニアを患って休部を余儀なくされた。3年生になって復帰を果たし、O L B、D Eとして一年間フル出場するも、チームは関西大会の準決勝で涙を吞んだ。前半リードで折り返したものの、油断が生まれたことで逆転を許し、1 D一本差で敗れたのだ。

当時のコーチに勧められたのを契機に、大学では高等部のコーチとして活動することを決意した。一年間の研修期間を経て高等部に戻ったその年、チームは日本一になる。春の大会で敗れた悔しさや、秋の大会で奮起する原動力になった。ディフェンスコーディネーターを務めた4年生時にも優勝を果たすが、この年は年間通して負けなしの「パーフェクトシーズン」だった。

選手として活動した中学、高校の6年間より、コーチとして活動した3年間の記憶の方が強く残っている。高校生のために活動し、結果日本一を経験させてあげることができたことは、自身の成功体験となっている。

コーディネーターを務めた大学4年生時、印象に残るエピソードがある。ある3年生のD Bは、ボールに絡むプレーにはセンスを發揮したが、このほかタックルを苦手にしてきた。

パス主体のチームとの対戦となった関西大会の決勝戦ではその選手をスタメンで起用したが、ランを主体とするチームとの対戦となった全国大会の決勝戦ではタックルを得意とする下級生の選手を起用し、3年生の選手に出場の機会は与えられなかった。

「3年生が本気で勝ちたいと思うのはあたりまえ、でも1年生、2年生はそこまでの気持ちを持ってない。だからこそ、3年生に対しては『チームをまとめるのが君達の仕事』と言いつづけてきた。」という。自分の役割を果たすことについては、高校生の部員達にも口頃から説いていた。

だから、3年生のD Bの選手も、最後の試合に出られない悔しさはあっただろうが、与えられた立場で自分に何が求められているかを理解し、全力でチームの勝利に貢献することができたと思ってもらえていたらうれしい。

「自分はプロフェッショナルではないので、自分のためだと甘えが出てしまう。しかし、コーチの立場では、選手のために、高校生部員のためであれば一生懸命になれる。高等部を日本一にしたい。生徒たちに、本気で日本一をめざすこと、そしてその目標を達成することの楽しさに気づかせてあげたいとずっと思っていました。」

吉本とファイターズは似ている？

コーチの経験は、人を育てることの面白さに気づかせてくれた。吉本興業に興味を持ったのもそこだった。「吉本興業とファイターズは似ている」と言う。

十年以上タレントのマネージャーを務めてきたが、この仕事はタレントの稼ぎによって給料が変わるわけではない。ただ、人生をかけて必死に稽古しているのを目の当たりにすると、「どうにかしてこのタレントを世に送り出したい」という思いが込み上げてくる。タレントが活躍できる環境を整えて、常にモチベーションを高められるようにするのがマネージャーの仕事だ。

「自分ではない誰かのためだから一生懸命になる。」

なかなか芽の出ない芸人や駆け出しの若手に就くこともあったが、苦労を共にしたという思いはお互い持ち続けている。彼らと力を合わせて、現状を打破しようと考えて取り組めたことは、貴重な経験であった。

コーチとして、表舞台と舞台裏の両方を見てきたからこそわかることがある。自分よりも誰かのことを考える。お客さんが笑っていなければ意味がない。それを第一に考えられるのもコーチの経験があったからだ。

ファイターズでの学び

学生でありながら「コーチ」の役割を担えたことは、これまでの人生の中でも大きな経験になっている。大学のファイターズはまさに社会の縮図である。

一番勝ちたい4年生は一番大変だし、一番がんばっていないといけない。その姿を見ているから、下級生もがんばらなければならない。

勝つための方法は一つではなく、活躍の場は人によって異なる。試合に出て活躍することだけが日本一への貢献ではない。それを教わったのもファイターズだ。

試合に出られない4年生がスカウトチームのメンバーとしてどうやって試合を想定させるかを繰り返して練習に臨んでいる。試合に出場する下級生はそんな先輩の姿を見て発奮しないわけがない。

自身も、必死の取り組みでチームに貢献する上級生の背中を見てきた。上が頑張れば下は付いてくる。ファイターズでは当たり前のことが、世の中ではそうではない。ファイターズの文化が、実は稀有な存在であることを社会に出る知る。

仕事においても「この会社を良くするために、自分はどう立ち振る舞うべきか」を考えている。自分は何をすべきなのかということもファイターズでは常に求められてきた。それはファイターズならではの経験だった。

生涯ファイターズ

「生涯ファイターズ」。今回の話にタイトルを付けるとしたら、という問いに対する木本さんの答えだ。卒業しても自分自身がファイターズであることは変わらない。ファイターズの魂やスピリット、学んだことが消えることは無い。

「自分の学生時代からファイターズを取ったら何も残らない。語れるようなものはない。」
それかやってみてほしい。それ以外に誰かに語れるようなものもない。けれども、それを悲しいこととは思わない。日本で一番になれることに人生を懸けられたのは誇るべきことだ。

それは立場によって変わるものではなく、試合に出場している選手、していない選手。サイドラインで走り回っているスタッフ。全員でファイターズが成り立っている。自分の今与えられている役割や仕事に誇りを持ち、ファイターズの一員としてそのデキヤルを付けてそこに居られることにプライドを持って欲しいと願っている。

チームスポーツをやっている良かったと思うことは、自分がミスしても助けてくれる仲間がいるということ。誰かが苦しんでいる、困っている時に助けられる、手を差し伸べる人になって欲しい。その中でも、すべてにおいてトップレベルの人間をめざして欲しい。人はいつでも変わるることができる。考え方が変わることによって急激に成長できる。

ファイターズというチームは卒業生、監督、コーチ、選手、スタッフすべてが支え合って成り立っている。卒業してからそれぞれの立場からファイターズを支えて欲しいと願っている。

文 Ⅱ 安在海人(3年)